



# 岐阜大学機関リポジトリ

## Gifu University Institutional Repository

Title	4. 日本語・日本事情(2002年度・2003年度前学期)
Author(s)	中須賀, 徳行; 牟田, おりゑ; 森田, 晃一
Citation	[岐阜大学留学生センター紀要 = Bulletin of the International Student Center Gifu University] no.[2003] p.[82]-[87]
Issue Date	2004-03
Rights	
Version	岐阜大学留学生センター (The International Student Center Gifu University)
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12099/3414">http://hdl.handle.net/20.500.12099/3414</a>

この資料の著作権は、各資料の著者・学協会・出版社等に帰属します。

## 4. 日本語・日本事情

留学生センター教授 中須賀徳行・牟田おりえ・森田晃一

### 1. 岐阜大学全学共通教育における日本語・日本事情教育の概要

日本語演習科目および日本事情科目は、もともと外国人学部留学生（および帰国子女）のために開講されているものであるが、学術交流協定校から来ている留学生（特別聴講学生）や日本語・日本文化研修生にも、日本語のレベルが合う場合には門戸を開き、単位互換ができるように配慮している。平成14年度日本語・日本事情科目を受講した留学生は延べ人数では前期38名、後期28名、合計66名であった。

履修した日本語科目のうち、4単位（地域科学部は6単位）までは一つの外国語に限って充当でき、また日本事情科目についても6単位まではジャンル別科目の人文科学系あるいは社会科学系科目の単位に充当できることになっている。

日本語授業計画を作成するにあたっては、日本語による専門の授業が理解でき、また日本語の基礎文献等が読めるようにということを目指した。日本事情の場合には、日本の文化や歴史を学ぶことを通して異文化理解を進め、日本での勉学や生活がスムーズにいくようにということに力点を置いた。いずれにしても留学生の日本語能力には相当の差があり、特に漢字の読み書きでは学力差が著しいためその克服に苦慮した。

以上2名の教官が日本語演習科目をそれぞれ半期2コマずつ、日本事情科目を半期1コマずつ、1年間にわたって担当したが、日本語DIV（後期）は履修者がいなかった。以下の授業科目でAあるいはCは中須賀が、BあるいはDは牟田が担当したことを示している。なお各授業科目のシラバスについては「全学共通教育シラバス - 授業案内 - 平成14年度、岐阜大学」に掲載してあるのでそちらを参照されたい。

#### 1.1 日本語演習科目

##### 1.1.1 2002年度前期

###### 日本語C I（読解）

日本語の講義が理解でき、また基礎的な専門書が読めるように、標準的な日本語の教科書（光村図書「中学国語2」）などを題材にして、エッセイ（佐々木瑞枝）・小説（ねじめ正一、向田邦子）・翻訳文（イーク原作・城山三郎訳）・近代短歌（俵万智、北原白秋ほか）等を学習した。専門家による朗読のテープを使用したり、関連するビデオ映像を用いて作品の背景を理解できるように努め、読解、漢字の読み書きや作文の訓練を行った。登録したのは、中国・豪州・米国・ポーランドの7名の学生であった。毎回授業の最初に漢字の小テストを実施したところ、漢字圏（東アジア）の学生が一般的にいい成績を取ったのに対して、非漢字圏の学生は漢字をきわめて苦手としていた。ただしポーランドの学生は厳しい教育を受けてきたこともあって、例外的にきわめてよい成績を残した。テキストは全体としてレベル的に合っていたが、短歌や心理描写を含む散文は難しかったようである。

## 日本語 C Ⅲ (聴解)

中級用の教材(「ニュースで学ぶ日本語」)を基にテープによる聴解練習を行った。登録したのは、中国・韓国・マレーシア・米国の学生4名であった。聴いた結果を黒板に、なるべく漢字を使って書くように指示したが、韓国・マレーシアの学生にとってはやはり漢字が難関であったのに対し、中国の学生にとってはカタカナで書かれるような外来語を苦手とした。比較的単調に見える訓練ではあるが、学生にとっては緊張の続く学習であり、また内容に応じて日本の文化的背景などについて説明したので、効果は着実に上がり聴解能力と書く力が伸びていった。

## 日本語 D I

友松悦子他著『どんなときどう使う日本語表現文型 500』(アルク, 1997)を中心に、文型練習と、それらの文型の使われている新聞記事、本の抜粋等を読み、作文・レポートおよび口頭発表に役立つ練習をねらいとした。文型中心のクラス作業が単調になりがちなのを避ける意味で、読み物も使用した。履修者は中国、マレーシア、アメリカ、オーストラリアの学部生と交換留学生の7名であった。

## 日本語 D Ⅲ

近藤安月子・丸山千歌『日本への招待』(東京大学出版会, 2001)の前半を中心に、教科書学習の後、各課の内容についてディスカッションし、それを作文にまとめる宿題を頻繁に課して、クリニックを行った。また、学期末には、各課からテーマを選んでレポート作成を課し、成績評価の一部とした。年齢的にも、語学力の点でも通常の学部学生より上の医学部学生も入っていたため、活発なディスカッションができた上、毎回の宿題提出、クリニックが徹底できた。履修生は中国、マレーシア、アメリカの学部生および交換留学生、計7名である。

## 1.1.2 2002 年度後期

## 日本語 C Ⅱ (読解)

日本語 C I に引き続き講義で、同じ教科書(光村図書「中学国語 2」)や他の視聴覚教材を使って、日本語による講義を理解し、基礎的な専門書が読めるように、読解の演習を行ったが、登録したのは中国人学生1名のみであった。

随筆(樺島忠夫)、小説(赤瀬川隼)、科学啓蒙書(正木健雄)、社会評論(角山栄)、漢詩(李白ほか)などを題材にしたが、最後のものは、中国文化を日本がどのように受容したのかということを理解させるために取り上げたものである。前期と同様に毎回、授業の最初に漢字の小テストを実施した。またときどき小説などに出てくる言い回しを使って、作文の訓練を行った。

## 日本語 C Ⅳ (聴解)

登録した学生は日研究生(中国・韓国・タイ・豪州・スウェーデン)5名と特別聴講学生2名の計7名で、全体として聴解能力を含め日本語能力は高かった。前期に引き続き中級用教材(「ニュースで学ぶ日本語」)を基にテープによる聴解練習を行ったが、フェノロサや大阪紡績の創設と日本における産業革命との関連など、関連するビデオを見せるなどして、難しい表現や内容面についても具体的に解説するという方法をとった。学生もきわめてまじめに参加した。

## 日本語 D II

二通信子・佐藤不二子著『留学生のための論理的な文章の書き方』（スリーエーネットワーク、2000）を前年度に続き採用した。学部留学生と交換留学生、および日本語・日本文化研修プログラム留学生の1人が履修した混成クラスだったが、練習問題とクリニックとで、毎回全員が集中し充実感のあるクラスだった。バランスよく各種のエクササイズのできるテキストであることと、クリニックをはじめ、学生には必然性のはっきり見られる練習だったことが充実感の大きな要因だと思われる。

レポートの書き方に関して、欧米系とアジア系学生の認識やトレーニングの差がはっきりと出たことも、前年同様であった。中国、マレーシア、オーストラリアの学部生、交換留学生、日本語・日本文化研修留学生、あわせて8名のクラスであった。期末のレポートとして、任意のテーマで参考文献リストも入れた論文形式のレポートを課したが、内容的にも技術的にもすばらしいレポートを提出する交換留学生がいたことも印象的であった。

### 1.2 日本事情科目

日本事情については、1999 度から中須賀が日本史、牟田が文学作品を題材に異文化理解教育を行ってきたが、本年度においてもそれを踏襲した。

#### 1.2.1 2002 年度前期

##### 日本事情 A I

日本の歴史を学習することを通して、日本の社会や文化を理解できるように心がけた。この授業には学部留学生（中国・韓国・マレーシアの4人）以外に特別聴講学生（豪州）も登録し、参加者は全体で5名であった。まず最初の時間に日本史を30分ほど解説したビデオを見せ、英語の対訳も付けたレジュメを見せながら日本史を概観した。次の時間から日本列島における石器時代、縄文・弥生時代をへて、古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代から戦国時代までを学習した。

教科書には学生のリテラシーを考慮して「中学社会 - 歴史的分野」（日本書籍）を用いたが、この教科書には図表も多く掲載されており、また日本史独特の特殊な用語や人名、地名などにはルビが振ってあったので、難易度としては適当であったと判断される。NHK「歴史でみる日本」のようなビデオなどの視聴覚教材も毎時間用い、解説を加えて教科書を補った。

##### 日本事情 B I

『日本の詩歌 14 萩原朔太郎』（中公文庫）をテキストとし、明治・大正・昭和に生きた朔太郎の詩に表れる日本の文化・歴史的背景を学び、現在につながるテーマを考えた。主要なテーマは、朔太郎の歴史教育観と現在の歴史教科書問題、桜観の変遷、親子関係（家制度への挑戦と相克）、社会と個人（時代の価値観）、戦争観等。時代の価値観や体制に挑戦するような生き方をしながら、自分の生きざまを「無用の書物」としなればならなかった朔太郎の詩を通して見えてくるものをディスカッションを交えて、考えていった。

文学を題材とする場合、学生の関心がはっきりと分かれるため、不評の年と、2002 年度のように、すばらしい反応を示す学生のいる年とで、教師にとっても、クラスの雰囲気にとっても、充実感の有る無しに大きな差が出る。8名の履修生のうち、工学部の中国人男子学生が大半を占める中で、オーストラリアの交換留学生が日本語力では学部生に劣るにもかかわらず、感性や理解力の点でも、

関心の示し方の点でも遥かに優れていた。交換留学生在がディスカッションをリードする形で進んだが、それはレポートにもはっきり現れ、交換留学生的のレポートには文学を通して学ぶ日本事情の意義が見事に表れた。一方、学部留学生的のレポートの中には、コースの内容が全く生きず、主観的な日本批判を展開する場として利用する者もいて、日本事情クラスの難しさを2000年度の苦い経験と重ねて痛感させられた。学部留学生的は1年の交換留学生的とくらべ、様々な点でプレッシャーもストレスも大きく、このような発表の機会の多いクラスでそれらが噴出／発現するのかもしれない。そのような留学生的の心理面も含めて、包容できる度量が教師に求められるのだから、教師にとってもチャレンジとして受け止める姿勢を保てるよう努力したい。

### 1.2.2 2002年度後期

#### 日本事情 A II

日本事情 A I に引き続き講義で、同じ教科書（「中学社会 - 歴史的分野」, 日本書籍）を用いて授業を進めた。具体的には江戸時代に始まり、明治、大正から昭和、現代までを概観した。具体的に理解できるよう、ビデオや図鑑などの視聴覚教材や英語による解説資料なども与えて解説した。定期試験では、暗記することだけを要求するのではないことを示すために、選択肢を与えて選ばせるようにした。

この授業に参加した4名は全員韓国の学部留学生的（日韓理工系学部留学生的事業）だったので、日本と朝鮮の歴史的な交流などに重点をおいて解説した。

#### 日本事情 B II

日本社会と日本人の生活に表れる文化に触れることを目的として、有吉佐和子著『恍惚の人』をテキストとして選んだ。1週間に1章読ませ、各章のテーマについて講義を行った。非漢字圏の留学生的のために、テキストの朗読を録音し、時には漢字リストを与え、留学生的には当番制で各章の内容に関する質問事項に答えながら、ストーリーの要約をさせた。

講義のテーマは、日本における宗教とその歴史、政治との関わり、葬式、火葬の歴史、女性問題（戦後憲法、女性の就業に関する問題、家庭における役割分担に関するデータ等）、老人問題（『恍惚の人』の時代と現在）、文学などに扱われる老いのテーマ、日常生活に表れた文化（『奥の細道』, 昔話等）、老人問題と建築様式の変化など多岐にわたったが、平均的家族の生活と問題を理解する意味で留学生的には日本社会、文化への入門的知識を与えられたと思う。

1 評価は、毎週のセミナー発表および質問に文章で答える形式と、各テーマを選んでレポートを書かせた。今年のクラスは、中国、マレーシアの学部留学生的とオーストラリアの交換留学生的、計8名であった。前期同様、オーストラリアの交換留学生的2名が理解度、熱意、毎週の発表と期末のレポートすべてにおいて、リードするクラスになった。毎週20～30ページ読んで、内容についてセミナー形式で発表し、最後に大きなテーマでレポートを書くという要求度は厳しかったというが、だからこそ力がついたと思うというコメントを交換留学生的からもらったことで、安堵した。

## 2. 2003年度の概要

平成14年度まで全学共通日本語・日本事情担当の一人であった中須賀徳行教授が平成15年3月

に定年退官し、後任として森田晃一教授が平成 15 年度前期からの全学共通日本語・日本事情科目担当に加わった。森田の担当は日本語・日本事情 A あるいは C である。日本語・日本事情科目を受講した留学生は延べ人数では前期 41 名であった。

## 2.1 日本語演習科目

### 2.1.1 2003 年度前期

#### 日本語 C I

日本語の運用能力の向上と、あわせて日本文化への理解を深めるという目的で、生活文化、とくに人生儀礼についての資料を題材とし、これに関する聴解・読解の練習をおこなった。具体的なトピックとしては、人生儀礼の内、「出産・誕生」「幼児から小学生」「中学・高校生」「成人への仲間入り」「恋愛・結婚」「親としての時代」など、壮年期までの内容をあつかった。毎回、内容についてのディスカッションをおこなうとともに、小テストを実施して理解度をはかり、次回に補足説明をした。また、学期末には、日本の人生儀礼を母国のそれとを比較するレポートを課し、成績評価の一部とした。受講生は、韓国・中国・マレーシアからの学部生、計 7 人であった。

#### 日本語 C III

山本富美子編著『国境を越えて [本文編]』、山本富美子・工藤嘉名子編著『同 [文型・表現練習編]』を使用し、このテキストの内容順に「文明の多様性と異質性」「人口動態」「戦後の社会構造の変容」「戦後の経済構造の変容」について学習を進めた。教授にあたっては、とくにテーマの背景知識に関する説明を十分におこない、その上で受講生の母国と比較させながらディスカッションし、問題点が鮮明になるように工夫した。学期末には、学習した内容をもとにレポートを課し、成績評価の一部とした。受講生は、韓国・中国の学部生、計 3 人であった。

#### 日本語 D I

新たな試みとして、日本人が読む一般書を教材にしながら、内容理解とともに、要約と文章表現を含めた総合的な上級日本語教育を目指して、村上春樹著『村上朝日堂』（新潮文庫）を選んだ。ルビのない一般書としては、読みやすく、現代日本理解の一端ともなる随筆内容であった。履修学生は学部留学生 2 名と交換留学生 1 名であったため、一人が毎回 1 編ずつ担当して、読んでくことを課し、1 回の授業で 3 編読解・ディスカッションができた。さらに、各随筆の要約と感想を毎週宿題とし、添削とクリニック（代表的な間違い例を名前を伏せてタイプ・プリントし、他の学生に間違いを指摘・訂正させる作業）によって、文法・表現のチェックを学生相互に行い、自己の文法ミスの確認が徹底できたと思う。

要約は正確な内容理解と簡潔な表現という点で、母語でも難しいが、毎週の宿題にもかかわらず、全員きちんと提出し、添削・クリニックによって最終回には間違い例が減少したのは成果である。要約作業は、クラス内での読解作業を経ているため、読解が不十分であるか否かのチェックにもなり、有効であった。文庫本を読む自信がついたせいか、自分で続けて読んでいきたいから、本を推薦してほしいという要望が出された。

## 日本語 D Ⅲ

聴解能力を高め、語彙を増やす目的で、テレビ・ドキュメンタリーその他の映像教材を使用した。学部留学生にとって、テレビ・メディアの日本語と幅広い内容に接し、聴きっぱなしでなく、スクリプトを読むことによって語彙の定着を図った。テレビ番組を書き起こし、ルビ入りのスクリプトを作成するという作業は、教師側にとって毎週多くの時間がかかる苦しいものであったが、成果はあったように思う。選んだ番組は日本近・現代史、日本人のルーツを探る考古学・DNA 研究、伝統芸能の今日、歴史的祭と現代人の関わり方など幅広い分野のドキュメンタリー番組を選んだ。

クラス作業は、スクリプトなしで視聴し、内容確認、その後、スクリプトを読み、語彙・表現・内容のチェック、そして、翌週にその箇所テストをした。テストの目的は、把握した内容を的確な語彙・文法で簡潔に表現できるかで、聴解そのものは無難にこなす学生でも、文章表現では文法的ミスのために内容を再現することができない学生や、逆に、聴解能力は劣るが、スクリプトの日本語をマスターしてテストでは的確な日本語で内容を再現できる学生など、それぞれ違った面で差が表れた。このことが、それぞれの学生に自己の問題点を自覚させることにつながり、来日間も無い留学生にとっては自信をつけさせ、来日 2、3 年後の学生にはさらなる日本語学習が必要だと痛感させたことが成果と言える。履修学生は学部留学生 6 名であった。

## 2. 2 日本事情科目

日本事情については、牟田が文学作品を、森田が文化・歴史を題材に異文化理解教育を行った。

### 2.2.1 2003 年度前期

#### 日本事情 A I

現代日本を理解するための一方法として、この科目では日本の歴史を講義することとした。テキストに東京外国語大学編『留学生のための日本史』を使用し、この内容順に「歴史を学ぶ」「ひとがすむ」「米をつくる」「統一政権の誕生」「古代国家の形成」「律令国家の変容」「武士政権の登場」まで、原始・古代から中世前半までの歴史を概観した。はじめて日本の歴史を学習する受講生のために、該当する時代のビデオを視聴したが、ビデオの解説が難解であったようで、あまり効果的とはいえなかった。学期末に、学習した内容をもとに、それぞれの母国の宗教に関するレポートを課し、成績評価の一部とした。受講生は、韓国・中国・マレーシアからの学部生および日本語・日本文化研修プログラム履修生、計 10 人であった。

#### 日本事情 B I

『日本の詩歌 14 萩原朔太郎』（中公文庫）をテキストとし、明治・大正・昭和に生きた朔太郎の詩に表れる日本の文化・歴史的背景を学び、現在につながるテーマを考えた。主要なテーマは、朔太郎の歴史教育観と現在の歴史教科書問題、桜観の変遷、親子関係（家制度への挑戦と相克）、社会と個人（時代の価値観）、戦争観等。時代の価値観や体制に挑戦するような生き方をしながら、自分の生きざまを「無用の書物」としなければならなかった朔太郎の詩を通して見えてくるものをディスカッションを交えて、考えていった。

学部留学生 5 人、日本語・日本文化研修留学生 5 人の計 10 人が履修した。